

2017 Vol.10

GLOCAL



Forum

- 「南」の国に眼を向けた先駆的愛知県人たち —— 青木澄夫
- 伊吹 —— 蜂矢真郷
- 内蒙古大学との学術交流：ツーリズム研究基盤の形成
と漢文化周辺地域の「民俗」 —— 澁谷鎮明

Note

- 看護師が怒りを経験するとき —— 渋谷菜穂子
- 人文学部棟院生室のここ4年間における
知られざる活動 —— 林 泰正

News & Record

- 第6回 教員研究会を開催

GLOCAL

GLOCALは、GLOBALとLOCALを組み合わせた造語であり、地球規模でのグローバルと身近なローカルを、ともに等しく重視する考え方を意味しています。



ごあいさつ

中部大学大学院、国際人間学研究科レポート GLOCAL Vol.10 をお届け致します。

小誌 GLOCAL が創刊されたのは 2012 年 10 月、4 年 4 か月前のことです。創刊号から数えて 10 冊目、今号は節目の Vol.10 となりました。この間、本研究科の日頃の活動の一端を知っていただくために、教員や院生によるレポート・エッセイ・ノートなどを掲載してきました。国際関係学、言語文化、心理学、歴史学・地理学の 4 つの専攻からなる本研究科では、身の回りのありふれたテーマから国際社会・経済を揺るがすようなテーマに至るまで、幅広い対象に対して関心を抱く教員や院生が、日々研究を行っています。文字通り LOCAL なスケールから GLOBAL なスケールに至るまでの幅広い範囲をカバーしているのが特徴で、大学院に進学してくる学生の関心領域も多岐にわたっています。

小誌 GLOCAL は、教員による講義・研究指導など通常の活動以外に、研究科が主催するシンポジウムや講演会などに関する内容も紹介してきました。われわれの日々の生活にも影響を及ぼす国際的事件、国内で生じた大震災と震災後の取り組み、さらには、ネットワーク化した現代社会における幸福の追求などについて、本研究科の教員を中心に議論をする機会をもってきました。またこれらと並行して、地元愛知や春日井における地域の歴史・文化・伝統をテーマとしたシンポジウムも開催してきました。旧街道や城址など地域に残された歴史的遺産を活かしたまちづくりに関するシンポジウムでは、学内外から多くの参加者を迎えて意見を交わすことができました。

このように GLOCAL は、本研究科で教育・研究活動を行っている教員やそのもとで勉学に励む院生の活動だけでなく、ここを拠点に行われるシンポジウム・イベントなどについても、その成果を情報として発信してきました。現代の大学・大学院は、教育・研究機関であると同時に社会の中においてある種プラットフォームのような役割を果たしています。このプラットフォームに縁あって集い繋がりをもった多くの人々による知的活動のひとつコマひとつコマを、これからも伝えていきたいと考えております。

今後とも GLOCAL を、どうぞよろしくお願い致します。

2017年2月20日

林 上 (中部大学国際人間学研究科長)





Profile

国際人間学研究科 国際関係学専攻教授

青木 澄夫 (AOKI Sumio)

1974年に富山大学文理学部文学科国史学専攻を卒業。民間会社、ナイロビ日本人学校・ダレスサラーム日本語補習校現地採用助教諭等を経て、1980年に国際協力事業団（現在の国際協力機構 JICA）に入団。2004年にタンザニア事務所長を最後に、本学に着任。著書は『放浪の作家安藤盛と「からゆきさん」』、『日本人のアフリカ「発見」』、『アフリカに渡った日本人』と、近刊の『日本人が見た100年前のインドネシア 日本人社会と写真絵葉書』。解説に復刊『南洋年鑑 全4巻』、共著に『シンガポール日本人社会100年史』など。



「南」の国に眼を向けた先駆的愛知県人たち



はじめに

本年3月を以て中部大学を去る私にとって、心残りは2月から3月にかけて予定していた企画展「『南』の国に眼を向けた先駆的愛知県人たち」を開催できなくなったことだ。

私がサラリーマン時代に刊行した『アフリカに渡った日本人』の主人公の一人で、日本人初のアフリカ旅行記を書いたのは、豊橋市出身の中村直吉だった。

本学に着任して、日本とアフリカ・東南アジアの関係・交流史を研究する際には、常に愛知県人を含む「グローバルな東海人」の存在が頭にあった。

10年ほど前の『アリーナ』に、「明治時代の愛知県人とシンガポール『南』の国を旅した世界無銭旅行家中村直吉と同世代人」や「昭和前半期における名古屋経済人のアフリカへの関心」を執筆したのも、この地域と世界を繋いだ人々への思いからだ。

それ以降も文献・資料の収集を続けていたが、まとまった形での発表はなく、心にモヤモヤが生じていた。そのため、昨年2月に民族資料博物館に本展開催の企画書を提出し、内諾をいただいていた。

しかし、私の「卒論」のひとつである、『日本人が見た100年前のインドネシア 日本人社会と写真絵葉書』が、インドネシアで2月に刊行されることになった。同書は、私が研究してきた、第二次世界大戦以前にインドネシアで日本人が関わって作成・販売された写真絵葉書を基に、100年前の日本人社会

を紹介するものだ。

2018年に、国交60周年を迎える日本とインドネシアだが、日本人のインドネシアへの関心は経済に傾き、インドネシア人の日本人観には、いまだに第二次世界大戦の影響が残る。私は、本書を特に日本とインドネシアの若い人たちに読んでもらいたいと考えていた。

そのため、中部大学の学生たちが研修でお世話になり、インドネシアの日本語教育では最も定評のあるパジャジャラン大学の友人（写真上）に翻訳を依頼し、日本語とインドネシア語の併記で、ジャカルタの邦字紙であるじゃかるた新聞社から本書は刊行されることになった。

一方、協力・翻訳者であるパジャジャラン大学日本語研究センターからは、本書の刊行に合わせ、1955年に非同盟、中立を謳って開催されたバンドン会議の会場（現在はアジア・アフリカ会議博物館）で、「日本人が残した写真絵葉書に見る100年前のインドネシア」展を、開催しないかという提案があった。

当初は3月の開催予定だったので、書籍の刊行と企画展の準備で、日本に不在となることが想定された。そのため、遺憾ながら本学での企画展を断念せざるを得なくなった。

企画書は以下のとおりだった。

**『南』の国に眼を向けた先駆的愛知県人たち
中村直吉、伊藤次郎左衛門祐民、志賀重昂、
徳川義親、橋瑞超、金子光晴などを中心に**

近年、日本企業の海外進出が際立っている。

とりわけ、私たちが居住する愛知県では、製造業、非製造業を問わず、成長著しい「南」の国々に、大小問わず、多数の企業が事業を展開している。

俗に、愛知県人は保守的で、他の地域への関心は薄いと言われてきた。しかし、日本と東南アジア、南アジア、アフリカとの関係を見るとき、愛知県人の果たしてきた役割は、決して小さくない。

本企画展では、日本と東南アジア、南アジア、アフリカの関係・交流史を概観しながら、明治以降、同地域と関わった先駆的愛知県人の足跡を、申請者の所有する資料とパネルで紹介する。

1901年から6年半余にわたり、五大大陸を放浪し、帰国後当時の売れっ子冒険作家の押川春浪と5冊の『五大洲探険記』を著した中村直吉（1865～1932）は、愛知県豊橋市の出身である。帽子店主だった中村は生涯に8冊の書籍を刊行したが、その内容は信ぴょう性がないものと無視されてきた。



しかし、各地に散在した「無告」の日本人の様子を知るうえで、その人数と引き、広範囲な地域と引き、中村の著作に勝るものはない。

松坂屋の中興の祖として知られる伊藤次郎左衛門祐民（1878～1940）は、近代的デパート経営の傍ら、上坂冬子の『揚輝荘、アジアに開いた窓 - 選ばれた留学生の館』で見られるように、アジアの学生の受け入れに積極

的だった。ビルマ僧ウ・オッタマとの交流は、戯曲『ビルマの太陽：オッタマ僧正と伊藤次郎左衛門』で描かれ、著名な写真家長谷川伝次郎を伴ってのビルマ、インド巡礼は、長谷川の手になる二冊の写真集に収められた。



練習艦筑波に便乗して南太平洋諸国を訪問し、帰国後 24 歳で刊行した『南洋時事』で、一躍名を挙げた志賀重昂(1863～1927)は、岡崎市出身の地理学者でもあり、ジャーナリスト、評論家でもあった。日本ライン、恵那峡の命名者でもあり、『日本風景論』や『世界山水図説』などを残した志賀は、世界を三周したといい、当時のインテリとして、南アフリカを 2 度にわたって訪問している。



自伝『最後の殿様』の著者徳川義親(1886～1976)は、元越前藩主松平春嶽の 5 男に生まれ、1908 年に尾張徳川義禮の養子とな



り、義禮の死後尾張徳川家 19 代目を継いだ。1921 年、転地療養のため、マレー、ジャワで狩猟を行い、『馬來の野に狩して』などを著した。朝倉純孝と『馬來語四週問』も執筆し、シンガポールが日本軍の手に落ちた後、軍政顧問としてシンガポールに依願赴任した。

その他、西本願寺法主大谷光瑞の命で中央アジアを探検した橘瑞超(右：1890～1968)、『マレー蘭印紀行』を著した詩人の金子光晴(1895～1975)、また愛知県人ではないが、日蓮寺(現日泰寺)住職の日置黙仙(1847～1920)など、東南アジア、南アジア、アフリカに関わった、有名、無名の愛知県人の足跡を紹介する。



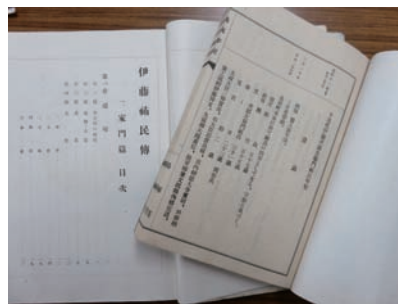
伊藤次郎左衛門祐民

この企画展では、東南アジアの植物を研究し、『馬來 印度 熱帯植物奇観』を著した三好学(岐阜県出身)や、シンガポールで雑誌『南洋時代』を発行した三重県出身の辻森民三、名古屋の医師で東南アジアを歩いた松波寅吉なども紹介するつもりだったが、最も力点を置きたかった人物は、第十五代伊藤次郎左衛門祐民だった。

伊藤は、名古屋商工会議所会頭を務めるなど、名古屋経済界の重鎮だったうえ、上坂の著や、名古屋市博物館の企画展カタログ『名古屋の商人 伊藤次郎左衛門 呉服屋からデパートへ』、揚輝荘の会が編集した『揚輝荘と祐民 よみがえる松坂屋創業者の理想郷』などにより、よく知られている。

祐民は商人であったため、自ら書き記したものは少ないが、松坂屋については『創立二十年記念写真帖』(1930 年)や『松坂屋三百年史』(1935 年)などの社史が多数刊行されている。

祐民のものでは、父の伊藤祐良の人生を綴った『祐良傳』(1940 年)や、祐民の還暦を記念して関係者に配布された年譜『戊寅年契』(1938 年 下右)、戦後に刊行された大著『伊藤祐民伝』(1952 年 下左)、『第十五代伊藤次郎左衛門祐民追想録』(1977 年)などがある。



祐民が、ビルマの僧オッタマからの依頼を受け、ビルマの青少年を預かって教育し、その後、シャム(タイ)などの子弟の教育を引き受け、揚輝荘で育てたことなどは、上坂の著などで、よく知られている。

新聞各紙は、昨年 11 月にタイから元留学生の妻と長女が訪日し、揚輝荘で当時の日本人の同級生と出会った様子を報じている。

祐民の国際経験は、1909 年に渋沢栄一を団長とする渡米実業団のメンバーに 30 歳の若さで加わったことから始まる。この 3 ヶ月間の視察経験が、翌年に株式会社いとう呉服店としてデパートを誕生させることになる。

祐民は、名古屋商工会議所の初代会頭時代の 1931 年には、中国視察団の団長として 1000 名を率いて中国を訪れた。

妻の貞を失った後、揚輝荘に受け入れた千代とともに、1934 年にはビルマ、シャム、インドに巡礼に出かけた。同行者には、インド人のハリハラと写真家長谷川伝次郎がいた。ビルマでは元留学生と再会し、インドではオッタマと合流しながら、詩人タゴールにも面会した。

祐民は道中、長谷川に写真と 16 ミリフィルムの撮影を指示した。帰国後、3 時間余にわたるフィルムは求めに応じて各地で上映され、祐民の講演も 150 回に及んだ。

祐民はこの旅行の記録を書籍にして刊行する予定だったが、汽車の中に原稿を置き忘れ、幻の書となってしまった。

長谷川の写真は、『印度』(1939 年)と、祐民没後の 1941 年に、『佛蹟 印度、緬甸、泰国、仏印 故伊藤次郎左衛門氏仏蹟巡拝の記録』の豪華写真集として刊行されている。

私の手許には、松坂屋のご厚意でいただいた、16 ミリフィルムを DVD に落とした『昭和 9 年 印度紀行 佛蹟巡礼第 1 巻～9 巻』の 3 枚がある。



これらを含め、どなたかにも、「南」に目を向けた、東海の「グローバルな人々」の研究を引き継いでいただけないか、と思っている。



Profile

国際人間学研究科 言語文化学専攻 教授

蜂矢 真郷 (HACHIYA Masato)

京都大学文学部卒業、同志社大学大学院文学研究科修士課程修了、博士(文学)〔大阪大学〕。専門は、国語学(語構成、語彙史、古代語、形容詞)。著書に、『国語重複語の語構成論的研究』(1998 塙書房)、『国語派生語の語構成論的研究』(2010 同)、『古代語の謎を解く』(2010 大阪大学出版会)、『古代語形容詞の研究』(2014 清文堂出版)。第17回新村出賞受賞(1998)。(写真は、上野誠氏撮影)



伊 吹



伊吹山と風

伊吹山は、滋賀県(近江国)と岐阜県(の美濃国)との境にあり、その辺りは、伊勢湾と敦賀湾との間、つまり、本州の太平洋側と日本海側との間が最も狭い陸地であって、風の吹くところと言われる。

雲かかるといふきのたけになくしかはかせのつてにぞこ糸はきこゆる(為忠家初度百首三五五)

おぼつかないぶきおろしのかざさきにあさづまふねはあひやしぬらん(山家集一〇〇五)

などのように、伊吹山が風とともに詠まれる和歌もある。山家集の例の「あさづま」は、現滋賀県米原市朝妻筑摩に当たる「朝妻安左都末」(和名類聚抄・大東急本、近江国坂田郡郷名)と見られる。山家集にはイブキオロシとあるが、今も、愛知県では冬の北西の風を「伊吹おろし」と言う。名古屋大学の前身である第八高等学校の寮歌に、「伊吹おろし」の声消えて 木曾の流にささやけば」で始まる「伊吹おろし」(中山久・作詞、三橋要二郎・作曲、一九一六年)があり、名古屋市昭和区の鶴舞公園に「八高寮歌伊吹風碑」がある。

伊吹山は風の吹くところであることに注意しておきたい。つまり、伊吹は、風が吹く意ではないかと考えられてくる。

古事記・日本書紀などの例

古事記の倭建命やまとたけるのみことの条に、伊吹山は、

以こ其御刀草那藝こ置こ其美夜受比賣こ之許こ而取こ伊服岐能山之神こ幸行こ〔其の御刀の草那藝の剣を以て、其の美夜受比売の許に置いて、伊服岐能山の神を取りに幸行しき〕(景行)

とあり、イフキノ山「伊服岐能山」のように清音フである(片仮名の上傍線は上代仮名遣の甲類を、下傍線は同じく乙類を示す。以下同様)。日本書紀には、「近江五十葺山」・「膽吹山」(景行天皇四十年是歳)とある(これらのフの清濁は確認できない)。

ここに、伊吹山は神のいるところである。

山名ではないが、日本書紀に、吹棄氣噴之狹霧吹棄氣噴之狹霧此云浮枳于都屢伊浮岐能佐擬理所吹棄氣噴之狹霧生神号曰田心姫吹棄氣噴之狹霧〔吹き棄つる氣噴の狹霧吹棄氣噴之狹霧此をば浮枳于都屢伊浮岐能佐擬理と云ふに生まるる神を、号けて田心姫と曰す〕(神代上・第六段本書)

とあり、「吹棄氣噴之狹霧」の訓注にフキウツルイフキノサギリとあって、清音フのイフキ「氣噴」の例がある(古事記の「吹棄氣噴之狹霧」も、フキウツルイフキノサギリと訓んでよいと見られる)。このイフキは、「氣噴」「氣吹」に対する訓であるので、イ+フキの複合ととらえられて、そのイは息・呼吸の意と見られ、そのフキは動詞フク「吹」〔狭井川がはよ雲立ち渡りくもた敵火山木わたの葉うねびさやぎぬ風吹やまこかむとすかぜ加是布加牟登須〕(古事記・神武・二〇)の連用形である。

また、この日本書紀の例に対して、氣噴伊布岐(平平平)(日本書紀私記・御巫みかなぎ)

本10才)のように、時代が下ると、濁音ブであるイブキの訓がある。日本書紀私記・御巫本は、応永三十五[1428]年の書写であるが、その声点について、金田一春彦氏『国語アクセントの史的研究 原理と方法』[1974.3 塙書房]〔本論第二章第三節[五十七]〕は「鎌倉時代のアクセント資料に類する」と言われ、上野和昭氏『御巫本日本書紀私記』所載の体言のアクセント)〔国文学研究85 [1985.3]〕は、詳しい検討の上、一部の異なりはあるが、「多くは鎌倉時代のアクセントを反映していると思われる」とされており、同じ声点で示されるところの清濁もその頃のものであろうと見られ、イブキに濁音化するのはおよそ鎌倉時代と見てよい。

伊吹山(文明本節用集・イ)

そして、山名も、ブに濁音化したイブキヤマの例が室町時代に確認できる。

イフキ「氣噴」の例からは、そのイが息・呼吸の意と見られることが注意される。

イフ〜からイブ〜へ

イフ〜がイブ〜に濁音化する例としては、イフカシ[不審]「盾根(まよね)搔き下いふかしみく下言借見)……或本歌曰(略)一書歌曰「盾根搔き下いふかしみく下伊布可之美)……」(萬葉二六一四)、イフカル[詠]「……いふかりしく言借石)国のまほらを……」(萬葉一七五三)が、平安末期に下ると、イブカシ[不審]・イブカル[詠]「詠イブカル(平平平〇)」(類

聚名義抄・観法上六四[33ウ]に濁音化している。

また、鹿児島県の「指宿」は、「指宿^{以夫須岐}支」(和名類聚抄・大東急本、薩摩国郡名、元和本「指宿^{以夫須岐}」)とあり、「指」字はp韻尾が母音uを伴った二合仮名イフであるので、清音フのイフスキが本来であるが、「指^{イフスキ}又作宿^ス」(文明本節用集・イ)のように、室町時代に下るとイブスキと濁音フの例が見える。濁音化してイブになったので、訓コピであり、かつ、字形の類似した「指」字を用いるようになったものと見られる。

動詞イフク【息吹】

動詞イフク【息吹】の例もある。

……渡會^(わたらひ)の齋^(いつまのみや)宮^(かむかぜ)ゆ神風^(ふ)に吹^(ま)き惑^(まど)はし

〈伊吹或之〉……(萬葉一九九)

呼^{イフク}吸^イ氣^キ一息^キ、似^{タリ}於^ニ朝霧^{イフク}。〔呼吸^{イフク}く氣息^イ、朝霧^{イフク}に似^{タリ}たり。〕(日本書紀・雄略天皇即位前・圖書寮本)

『岩波古語辞典』は、この萬葉集の例について「『イは接頭語』吹く。」とし、日本書紀古訓の例について「『イは息。上代はイフキと清音』息を吹く。呼吸する。」として、両者を別語と扱っている。けれども、『日本国語大辞典』(第二版)は、別語としながらも、萬葉集の例について「『いふく』の『い』を、接頭語ではなく「息」と見なし「いぶく(息吹)」と同義とする説もある。」(「補注」欄)とし、『古語大辞典』は、「万葉集の用例の『い』は接頭語とみる説があるが、これも単に風が吹く意ではなく、「いぶく」ものは神で、風の神秘を説きあかす表現であったと考えられる。」(「語誌」欄)としていて、両例とも、清音フで、「息吹」の意と見るのがよいと考えられる(この点、後にも述べる)。

枕詞カムカゼノ【神風】

枕詞カムカゼノ【神風】は、地名「伊勢」にかかる。

神風^{かむかぜ}の加^{うみ}牟^{うみ}加^{うみ}是^{うみ}能^{うみ}伊^{うみ}勢^{うみ}の海^{うみ}の伊^{うみ}勢^{うみ}能^{うみ}宇^{うみ}美^{うみ}能^{うみ}大^{うみ}石^{うみ}に這^{うみ}ひ廻^{うみ}ろふ……(古事記・神武・一三)

……神風^(かむかぜ)の神^(かむかぜ)風^(かむかぜ)乃^(かむかぜ)伊^(かむかぜ)勢^(かむかぜ)の国^(かむかぜ)は伊^(かむかぜ)勢^(かむかぜ)能^(かむかぜ)国^(かむかぜ)者^(かむかぜ)沖^(かむかぜ)つ藻^(かむかぜ)も並^(かむかぜ)みたる波^(かむかぜ)に塩^(かむかぜ)氣^(かむかぜ)のみ香^(かむかぜ)れる国^(かむかぜ)に……(萬葉一六二)

是神風伊勢國 則常世之浪重浪歸國也 傍國可憐國也(是の神風の伊勢国は、則ち常世の浪の重浪歸する国なり。傍国の可憐し国なり)(日本書紀・垂仁天皇二十五年三月)

神風伊勢國之 百傳度逢泉之 拆鈴五十鈴宮所居神(神風の伊勢国の百伝度逢泉の宮所居神) 神風伊勢國の百伝度逢泉の宮所居神(日本書紀・神功皇后摂政前)

神倭磐余彦天皇(略)勅(天日別命)曰「國有(天津方)宜(平)其國(略)其邑有(神)名曰(伊勢津彦) (略)啓云「吾以(今夜)起(八風)吹(海水)乘(波浪)將(東入) (略)」(略)大風四起 扇(拳波瀾) (略)古語云「神風伊勢國 常世浪寄國」者 蓋此謂之(伊勢津彦) 逃令來往信濃國 (神倭磐余彦的天皇) (略)天日別命に勅して曰りたまはく、國に天津かたあり。其の國を平くべし。」とのりたまひ、(略)其の邑に神有り、名を伊勢津彦と曰ふ。(略)啓云さく「吾今夜を以て、八風を起して海水を吹き、波浪に乗りて東に入らむ。(略)」とまをす。(略)大風四起、波瀾を扇拳ぐ。(略)古語に云はく「神風の伊勢國、常世浪寄する國」といふは、蓋し此の謂ならむや。伊勢津彦の神は、逃れて信濃の國に來往けりといふ。(伊勢國風土記逸文 [萬葉集注釈])

日本書紀(神功皇后摂政前)の例の「百伝度」は「度逢」の「度」にかかる枕詞、同じく「拆鈴」は「五十鈴」にかかる枕詞である。伊勢國風土記逸文の例は、信濃の國が風の國ととらえられることにつながる。(注)

枕詞カムカゼノ【神風】については、次のように言われる。

伊勢湾頭に吹く風は他地方と異りてその方向とか風の強さなどに於て異常なるものあり、夙により神風と呼びならはしたるならむ。伊勢の國名は磯の國即ち海添の國の義なるべく、その海岸に時々奇しき風の吹きすさぶより神風と負はせたるなるべし。風土記にいへる伊勢津彦の伝説もかかる天然現象よりいひ出でたるならむか。(福井久蔵氏『新訂増補 枕詞の研究と釈義』)

伊勢の地は神のいる所であり、常に風の烈しい土地であるところから、伊勢にか

かる。(『時代別国語大辞典上代編』)

神風の息吹(息吹)のイと同音から「伊勢」にかかる。一説、イセツヒコが風を起した伝説があることなどから「伊勢」にかかる。(『岩波古語辞典』)

地名「伊勢」にかかる。伊勢が皇太神宮のある所であり、風がはげしいからという。一説に、神風の息吹(いぶき)の意で「い」にかかるとも。(『日本国語大辞典』(初版・第二版とも))

神風は神聖な風の意。伊勢は風のつよいところで、天照大神が鎮座するところから、その風を神風と称する。一説に、神風の息吹(いぶき)の意で、「い(伊)」にかかるとも。(阿部萬蔵・阿部猛両氏編『枕詞辞典』)

すなわち、神のいる伊勢神宮がある伊勢は風の強い土地であり、だからこそ伊勢国風土記逸文に伊勢津彦の説話があるのであろうが、他方、息は風でもあるととらえられ、つまり、イ【息】は息の意にも風の意にも用いられるので、枕詞カムカゼノ【神風】は、イ【息】の音を持つ「伊勢」にかかる、という関係であると考えられる。

そして、これらのカムカゼノ伊勢の例から見ると、動詞イフクの萬葉集の例は、伊勢の「渡會の齋宮」や「神風」とあるので、単に「吹く」意ではなく、「息吹」の意と見るのがよいと言える。さらに、「いぶく」ものは神で(『古語大辞典』)とあるように、神の吹く息が風となると見られる。それが、枕詞カムカゼノ【神風】がイ【息】の音を持つ「伊勢」にかかる最も大きい理由であろう。

息と風

日本書紀のイフキ【気噴】の例からは、そのイは息・呼吸の意と見られ、また、伊吹山の側からは、そのイは風の意と考えられた。息は風の一種であるので、いや、風は神の吹く息ととらえられて、イは息の意にも風の意にも用いられるととらえるのがよい。

以上のように、伊吹山は、神の吹く息であるところの風が吹く山の意であると考えられる。

(注)『古代語の謎を解く』(第三章一)



Profile

国際人間学研究科 国際関係学専攻 教授

澁谷 鎮明 (SHIBUYA Shizuaki)

名古屋大学大学院文学研究科史学地理学専攻満期退学。博士（地理学）。専門は人文地理学、韓国地域研究であり、韓国を中心とした風水地理思想の展開、日本人作成の近代都市図研究に関心を持つ。近年中部地方のインバウンド観光についても研究を行う。著書に『東アジア風水の未来を読む：東アジアの伝統知識風水の科学化（韓文）』（共著）、『自然と人間の環境史』（共著）、『現代韓国の地理学』（共著）など。



内蒙古大学との学術交流：ツーリズム研究 基盤の形成と漢文化周辺地域の「民俗」



内蒙古大学との出会い

昨年来、ふとしたことから中国の内モンゴル自治区にある内蒙古大学や、この地域の研究者と出会い、学術交流を行いつつある。昨年10月には自身が内蒙古大学（呼和浩特）と、内蒙古科技大学（包頭市）において講演を行うとともに、学術交流を行う機会を得た。

「ふとしたこと」というのは、国際関係学部の新学科発足に合わせて、教員有志で比較的身近な「アジアの多民族・多言語・多宗教地域」に視察旅行をしており、昨年夏たまたま内モンゴル地域を選んだことである。そしてその際に本研究科博士後期課程所属の内モンゴルからの留学生に現地での案内者を紹介してもらった。留学生は、この時に自分の義理の兄で、内蒙古大学蒙古学学院（モンゴル学学部）所属のプリンジラガル先生を紹介してくれた。これがすべての始まりである。

本稿では、今回の内蒙古大学との交流の経緯や、それを通じた内モンゴルに関わる自身の研究関心について簡単に述べたい。

内モンゴルの地域的特性

昨年夏は見聞を広めるための視察旅行であったが、予想以上に得た知見が多かった。「内モンゴル自治区」ではあるが、中国の一地方でもあることから、実際のところ漢族住民や、回族の人々も居住しており、「多民族・多言語・

多宗教」であることは理解していた。ただそのような中で、予想以上にモンゴル語やモンゴル文化が生きているように感じられた。

たとえばモンゴル族の人同士の電話での会話が、中国語とモンゴル語の両者を交えて行われる場面を目にしたし、街中の看板には、たいていの場合漢語に加えてモンゴル文字が記されていた（写真1）。

また、モンゴル族の人で、現在社会の中心にいる40歳代位の人々の中に、日本留学経験を持つ人がかなり多いように思われる。一時期、日本留学のブームがあったとの話も聞く。モンゴル語と日本語の構造がよく似ている日本語を学びやすいとの説明もあった。その説明が説得力を持ってしまふのは、日本語のうまい研究者や、日本の事情に通じた人々によく会うためでもある。

歴史学科の中の「ツーリズム専攻」

上記訪問の際に、プリンジラガル先生のご要望で、内蒙古大学蒙古学学院の副院長先生と面談した。内蒙古大学は中国の国家重点大学であるが、中でもこの蒙古学学院は、中国のモンゴル学研究の中心であるとともに、内モンゴル自治区のモンゴル族やモンゴル文化のよりどころでもあるだろう。事実、学内で蒙古学学院のみが、なんとモンゴル語で授業をしているという。

ここで聞きした話で印象に残ったのが、



【写真1】モンゴル語の看板

数年前に蒙古学学院に「ツーリズム学科」ができたという点である。しかも蒙古学学院はモンゴル語・文学、モンゴル文化・民俗、モンゴル史の、3つのパートに分かれているが、このうちモンゴル史の中に「ツーリズム専攻」ができてきているということである。

歴史学の中にツーリズム専攻があるのは、「中国の場合歴史観光がツーリズムの中心をなすため」という説明であるが、観光社会学や観光人類学、観光マーケティングなどが中心の日本と比べるとやや違和感が残る。

またツーリズム専攻のみが後発であるために、ここだけが大学院のプログラムを持っておらず、日本の大学と交流して、先々はツーリズム研究をする学生を大学院生として送りたいというご要望もあった。この際に「個人的学術交流はいくらでも」とお答えしたところ、帰国後、10月中旬に内蒙古大学で講演をするよう、プリンジラガル先生に招聘を受けた。

上述のような経緯があったために、講演の論題を「日本におけるインバウンドツーリズムと観光研究の視点」とし、中部地方のインバウンド観光の動向と、日本の近年の観光研究の変容について講演を行った。

昨今の日本におけるインバウンド観光の状況と、日本の観光研究の現況を話したため、やや教科書的な内容となったが、学生も多く聴講するということがあったので、適切であったかも知れない。特に日本の観光の新しい動きを端的に示すため、中部圏の産業観光やエコツーリズム、コンテンツツーリズムを紹介し、観光と地域表象の問題などにも触れた。

話題提供としてはおおむね好評であったと思うが、歴史学分野の教員が多かったことから、寺院などの観光地の歴史的妥当性についての議論が多かったように記憶している。また、講演後に女子学生が質問に来たが、その際の彼女の英語の流暢さには舌を巻いた。やはり地域のエリートということなのだろうか。

写真2はその講演の開催を知らせるポスターであるが、報告者の写真がなかった模様で、ネット上にあった、ずいぶんくだけた服装の写真が使われてしまった。



【写真2：講演会ポスター】

中国の主要な観光目的地としての大草原

今回の交流の中で、ツーリズムに関わったため、プリンジラガル先生の案内で、内モンゴルの主要な観光資源である大草原地域（写真3）に連れて行っていただいた。

内蒙古大学のある自治区の省都フフホト市の北方は、中国有数の大草原が広がり、さらにその北にある砂漠とともに、内モンゴルの重



【写真3：大草原とラクダの群れ】

要な観光資源となっている。現在この大草原では、「大草原ツアー」が行われ、移動式住居として知られるゲルに泊まり、自然環境と馬や羊などのモンゴルの牧畜文化を楽しむ場所となっている。いわばエコツーリズムと民族観光を合わせたような内容である。

この地域の航空路線、高速道路網、新幹線など交通網は急速に整備され、観光地としての地位は高まっていると考えられる。内蒙古旅游局のネットサイトを見ると「トイレ革命」とあり、都市地域からくる観光客のためにトイレの整備を行い、観光客のストレスをなくしていくとする努力もある。また写真4のように、観光用に整備され、「移動できないゲル」を持つ宿泊施設が多数作られつつある。

他方、国内的には大観光地であるが、インバウンド観光の側面で見ると、他地域に比してそれほど人気があるわけではない。またこの地域の草原ツアーは気温の低い厳しい冬には不可能であり、基本的に夏だけの観光地であり、冬の観光資源が少ないことは大きな特徴であるだろう。



【写真4：観光用ゲル】

漢族文化としての風水説話研究

ところで、10月の講演は、プリンジラガル先生の手配で、急速、包頭市の内蒙古科技大学でもほぼ同内容で講演を行うことになった。その講演の際に、民族文化研究所所長をされている包海青先生とお会いした。

包先生に筆者の研究関心が、ツーリズムだけでなく、東アジアの風水にもあることを告げると、「私もモンゴル族の『風水』について研究をしたことがある」とおっしゃった。

東アジアの風水研究の中で重要な課題の一つに「風水説話」研究があり、韓国などでも国文学や民俗学からの研究が盛んである。包先生はモンゴル民俗の研究をされているが、モンゴル民俗にどの程度漢文化が入っているのかに関する研究の一環として、漢文化の一つである風水を指標にして、モンゴル説話の研究をされているようであった。

写真5は、包先生に連れて行っていただいたモンゴル寺院である。寺院の責任者は、「山から来た白い象が来て良い泉のある場所を教えてください」という寺院の立地に関する伝承を話してくれた。これは恐らくは漢文化としての風水の「脈」の感覚を、白い象というモチーフを用いて表現したものと推察される。

内モンゴルも朝鮮半島も、日本も漢族文化である風水の周辺地域であり、風水説話を通じた比較研究の可能性を感じることができた。

本稿では、内蒙古大学との交流を軸に、筆者自身の専門、関心に引き寄せて内モンゴル地域との交流やその可能性について述べてきたが、おそらくこれ以外にも生態環境研究などの分野などにおいても、本学との学術交流の可能性のあるものとする。



【写真5：包頭市郊外のモンゴル寺院】



Profile

生命健康科学研究科 看護学専攻 教授

渋谷 菜穂子 (SHIBUYA Naoko)

名古屋市立大学大学院看護学研究科(精神保健看護学分野)博士後期課程修了。博士(看護学)。専門は精神看護学、メンタルヘルス。看護師として外科、内科、小児科、精神科に勤務。病院勤務を経験するうちに心理学に興味を持ち、大学・大学院(修士課程)で臨床心理学を専攻。看護師-患者間で起こる感情、特に「怒り」に関心を持つ。現在、国際人間学研究科心理学専攻 博士後期課程に在学中。



看護師が怒りを経験するとき



はじめに

看護師という職業は、患者と対面で接触し相手の感情を揺り動かしながらも、自分自身の感情のコントロールを求められる点で「感情労働」と言われている。

近年、看護職や福祉職職員等による患者に対する虐待と思われる行為が増えているが、これらに共通することは、患者(利用者)側に言葉によるコミュニケーションの障害があるため意思の疎通が図り難く、気持ちを通じ合うことが難しかったであろうということである。ケアを提供する相手と気持ちが通じ合えない時に何とも言えない感情に襲われ、懸命にやればやるほど報われない気持ちは増し、その報われない虚しさはやがて「怒り」や「憎しみ」に変わっていく、しかも周囲に助けてくれる人もなく孤立無援と感ずる場合には予想もつかない破壊的な行動へ結びつくことは容易に想像できることである。

しかし、看護師は看護教育を受ける過程で、患者に対して怒りを表出することは看護師としてあるまじき行為であり、「決してやってはならない事」とであると暗黙のうちに了解しているため、患者からどれほど理不尽な言葉を投げつけられてもじっと我慢して耐えてきたように思う。ただ、对患者場面において看護師が怒りをコントロールしていることは暗黙知・経験知にすぎず、日本では真に実証的な研究はこれまで見られなかった。そこで私は、

看護師(特に精神科看護師)の怒りに興味を持ち始め、怒りに焦点を当て研究を始めた。

怒りに関する先行研究

快-不快情動から分化した感情の1つである「怒り」は、集団を仮定しないと発生しないものである。怒りの感情は強度と負の性質が研究対象として姐上に乗せやすいと言われ、客観的に分析が可能と思われたことも、私が「看護師-患者」という対人関係間で起こりうる感情としての「怒り」に注目するようになった理由の1つである。

怒りは「自己/社会への、不当な、物理的・心理的侵害に対する自己防衛/社会維持のために喚起された準備状態」であり、攻撃性は「人に対して(身体的・心理的)危害を加えようと意図して行う行動」と定義されるが、怒りは攻撃的な反応と結びつけて考えられやすく、「怒り=攻撃性」と混同されることが多い。また怒りは、負の側面(破壊的機能などの否定的側面)だけではなく、正の側面(建設的な関係構築などの肯定的側面)の機能も持っている。

Averill(1982)の研究以降多くの論文で、人は怒りを経験した時に攻撃的な反応を望む一方で、実際に行うことは少ないという結果が示されている。怒りを経験した後の反応が常に攻撃的であるとは限らず、非攻撃的な反応もある。怒り感情を喚起させる要因は数多

くあり、怒り感情の喚起や表出に与える影響は複雑に絡み合っていることが推測される。たとえば木野(2000)は、日本人の代表的な怒りの具体的な表出方法として、感情的攻撃、嫌み、表情・口調、無視、遠回し、理性的説得、いつもどおり、の7つを抽出している。

しかし、元来、看護師はアサーティブに自己表現することが苦手である。自己表現のタイプは、アサーティブ、非主張的、攻撃的、間接的攻撃的の4タイプに分類される(渋谷、2007)が、看護師がアサーティブに表現できない理由として、看護師は人の役に立ちたいという思いが強く、共感的で優しいナースであらねばならないという気持ちが強いいため、看護師自身が自分のネガティブな感情を認めることなく抑圧してしまうためである(平木、2002)、と現在は一般的に考えられている。

最後に、人間の攻撃性の性差について、身体的攻撃性に関しては性差があまりみられないものの、女性が間接的攻撃(告げ口、相手の大事なものへの攻撃)の傾向を示すのに対し、男性は直接的攻撃(身体的・言語的攻撃など)を示す傾向にあることが科学的にも証明され(湯川、2005)、女性の攻撃性を否定していない。

精神障害者の怒りの体験

職務上適切に相応しい感情の内容や表出の

仕方が決められている。感情労働に関するこのような規則を「感情ルール」と呼ぶ。看護師と患者が互いの感情ルールを理解し、特に患者が看護師の感情ルールを習得することで相互行為は安定すると考えられるが、精神障害者は発症によって精神の柔軟さが失われ感情ルールを理解する余裕がなくなり、一方、看護師は感情操作や“患者を変える”のが容易でないために共感性が乏しいと患者理解が進まなくなる。また、精神科では看護師の対応は患者にとって攻撃・威嚇という雰囲気を持ち、精神障害者は発症によって精神の柔軟さが失われ感情ルールを理解する余裕がなくなり、一方、看護師は感情操作や“患者を変える”のが容易でないために共感性が乏しいと患者理解が進まなくなる。また、精神科では看護師の対応は患者にとって攻撃・威嚇という雰囲気を持ち、精神障害者は発症によって精神の柔軟さが失われ感情ルールを理解する余裕がなくなり、一方、看護師は感情操作や“患者を変える”のが容易でないために共感性が乏しいと患者理解が進まなくなる。

1. **共通点・類似点**：統合失調症患者は、健常者と同様の怒りの動機をもち、建設的な動機もあることが明らかとなった。また、自分に合った対処方法を身につけており、そのほとんどが建設的な方法であるなど、健常者と共通する部分が多かった。

2. **相違点**：怒りを示した相手との関係の深さや怒りの持続性（看護師の怒りは1日以内で収まるが、患者は6年経ってもまだ怒りを抱いていた）において、健常者とは異なり対象者の持つ妄想などの症状が一要因として捉えられた。また、怒りの原因として、騒音や他者からの言動について多く挙げられたことから、音刺激に敏感な傾向が考えられた。

3. **特殊性**：統合失調症患者は、怒りを宥和する効果があるとされる認知的再評価ができていないことが読み取れた。これは統合失調症患者の持つ融通の利かさや確信度の高い妄想などの症状が要因として捉えられた。

以上より、看護師が精神障害者の怒りを理解することは重要であり、自分自身の怒りをコントロールする認知行動の一助になると考える。

ここで、Averillの質問紙を使用して、日常生活場面と対患者場面で感じるそれぞれの怒りの強さを比較（t検定）したところ、日常生活場面>対患者場面 となり有意差がみられた。このことは、看護師が日常生活場面では対患者場面よりも強い怒りを感じていること、対患者場面においては怒り（の表出）を抑える傾向にある（意識的に抑える努力をしているのかどうかは不明）、ということを示している。そのため、実際に看護師が怒りを抑制しているのかどうか、抑制しているとしたらそうさせている要因は何か、を探る必要があるという考えに至った。

これまで、攻撃行動に至る看護師の怒りの感情に焦点を当て、ソーシャル・サポートとストレスとの関連や攻撃行動に向かう心理過程、及び怒りや攻撃性を表出する諸要因との関連を客観的・実証的に探求した研究は見当たらなかった。そこで、衝動行為（攻撃行動）に至るほどの、看護師個人では対処不可能な怒りに至った心理過程を解明することを目的に、約1,000人の精神科看護師を対象に調査を行った。精神科の看護師を対象にした理由は、精神科は基礎看護と並ぶほど看護学の中で各論の基礎と位置づけられる診療科であるとされるからである。

分析の結果、図1（右）のように、「ソーシャルサポート無し→ストレス増加→怒り喚起→攻撃性表出」という一連のプロセスを軸に、看護師の性格特性、共感性、社会的スキル、心理的負傷感、自意識などの諸要因がこのプロ

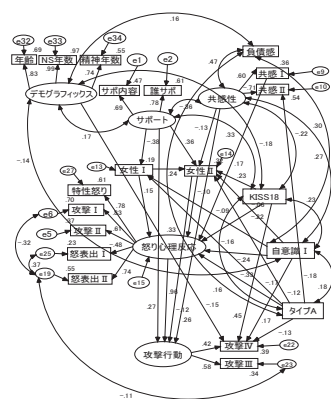
セス進行に影響を与えていることがわかった。なお、図1（左）は統計ソフトによる分析直後の結果であり、このままではわかりにくいパス図も、（右）図のように整理してパス図を描き直すことで諸要因の関連性が見やすくなった。

今後の展望

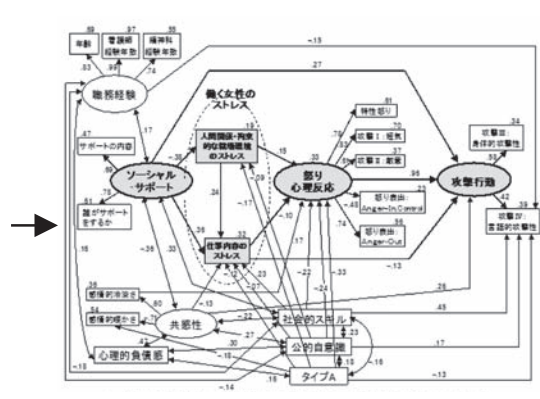
精神障害者の怒りの体験、及び精神科看護師の怒りの反応プロセスを中心に簡略的ではあるが述べてきた。今後、精神科看護師が怒りを感じた時に選択する方法に関する調査を行うなど、さらに研究を発展させたい。

参考・引用文献

- 武井麻子（2006）：ひと相手の仕事はなぜ疲れるのか、大和書房
 湯川進太郎（2005）：バイオレンスー攻撃と怒りの臨床心理学一、北大路書房
 海保博之他（2006）：心理学総合事典、朝倉書店
 大淵憲一他（1984）：怒りの経験(1)ーAverillの質問紙による成人と大学生の調査概況一、犯罪心理学研究、22（1）、15-35
 福田正治（2007）：感じる情動・学ぶ感情ー感情学序説一、ナカニシヤ出版
 木野和代（2000）：日本人の怒りの表出方法とその対人的影響、心理学研究、70(6)、494-502
 平木典子（2002）：ナースのためのアサーション、金子書房
 渋谷菜穂子他（2007）：看護師を対象としたRathus Assertiveness Schedule日本語版の作成、日本看護研究学会雑誌、30(1)、79-88
 渋谷菜穂子他（2009）：統合失調症患者の怒りの経験についての検討、日本看護医療学会雑誌、11(2)、26-38
 春日武彦（2001）：病んだ家族、散乱した室内、医学書院
 渋谷菜穂子他（2014）：精神科看護師における怒りの表出過程とその関連要因の因果モデルの作成、日本看護科学学会、34、340-352



（左）パス図（標準化推定値）



（右）パス図：怒りの表出過程とその関連諸要因の因果モデル

看護師の怒りについて

そもそも看護師は怒りを感じているのか？

図1：共分散構造分析の分析結果



Profile

国際人間学研究科 歴史学・地理学専攻博士後期課程2年

林 泰正 (HAYASHI Yasumasa)

2012年、中部大学人文学部歴史地理学科を卒業。2013年、中部大学大学院国際人間学研究科歴史学・地理学専攻博士前期課程に入学。2015年、同専攻博士後期課程に入学。専門は歴史地理学・交通地理学。林泰正(2014). 昭和初期に廃止された鉄道跡地の解体 - 岐阜県可児市広見地区・東濃鉄道を事例として-. 人文地理, 66 (7), 20-29.



人文学部棟院生室のここ4年間における 知られざる活動



本記事の趣旨

中部大学人文学部棟 26 号館 1 階に、国際人間学研究科の院生室は存在する。国際人間学研究科に所属する院生は複数の院生室に別れて割り振られているが、人文学部棟の院生室には、国際関係学専攻以外の専攻に所属する全ての院生の机が集結している。

通常、院生室に院生以外の人間が訪れる事は少なく、院生室内の様子やまた院生たちの活動などを窺い知ることは、人文学部に所属する学生や教職員であっても難しいのではないかと思われる。そこで、2013年から今日までの約4年間に人文学部棟院生室で院生たちが行ってきた活動のうち、筆者が主として関与した2事例を紹介する。

から始めた。整理を進めていくと、部屋の隅に机と椅子が埋もれていたことに気づいた。そこで院生室の一角に机を向かい合わせに並べて、休憩・交流のための「お茶スペース」とした。この頃になると、当時博士前期課程に在籍していた他の院生諸氏も院生室に集うようになり、面白がって本棚の整理を始めた。お茶スペースを利用して軽い懇親会のようなものを開催したりするようになっていった。お茶スペースには「院生室ノート」が設置され、お茶スペースと共に、情報交換や伝達、悩み相談などに大いに活用されるようになった。また、他の院生が使用していない時間帯には、その机の広さを利用して、自身の机ではできないような作業にも活用されるようになった(写真1)。

かくして院生室有志による院生室改造計画

は着々と進んでいたのであるが、お茶スペースに関して、不可避の障壁が存在した。火災予防の観点から、空焚きの恐れがある電気ポットの院生室への設置は認められていなかった。とはいえ、院生室には過去の院生が無断で持ち込んだと思われる電気ポットが秘匿されており、お茶スペースが本格稼働すると共に、秘密裏に使用されていた。もっとも、秘密というものはいつか詳らかになるもので、ある日のこと、ついに大学当局に電気ポットの使用が発覚し、使用停止の憂き目を見ることとなった。事件は電気ポットの使用停止が言い渡された後、筆者が学会参加のために院生室を留守にしていた最中に起きた。筆者が院生室に戻ると、コーヒーマーカーが電気ポットに成り代わってお茶スペースに鎮座していたのである。たしかに、電気ポットは禁

「お茶スペース」と コーヒーマーカー事件

2013年春、国際人間学研究科博士前期課程に筆者が入学した当時、院生室に常駐しているような院生は皆無だった。端的に言ってこのような状況に当惑したものの、これはチャンスだと思い直すことにした。すなわち、誰も居ないということは好き勝手やっても文句を言う人間が院生室内には誰も居ないということなのだから、筆者自身が研究しやすいような空間に作り替えてやろうと企んだ。

まずは、院生室に捨て置かれた物品の整理



写真1：現在のお茶スペースとお茶スペースを活用する院生

止されているものの、コーヒーマーカーは禁止されていない。かくして、院生室のコーヒーマーカーは、コーヒーを淹れるという本業の傍ら、時に緑茶を淹れるためのお湯を沸かし、時にカップ麺に注ぐお湯を沸かし、時にレトルト食品を温めるなど、大車輪の活躍をみせることとなる。

そもそも電気ポットが禁止されているのは前述の通り火災を防止するためであり、ましてやコーヒーマーカーのこのような目的外使用は、当然のことながら客観的に見て好ましくない状況ではあるのに異論の余地はない。とはいえ、何かしらのお湯を沸かすための手段が無ければ、早朝や夕方以降に温かいお湯を調達することが困難であり、付随して多くの困難や問題が発生することが懸念された。交渉の末、空焚きの心配が無い電気ケトルの使用が許可される運びとなった。現在では、院生のカンパによりインスタントコーヒーや緑茶などが常備され、お茶スペースはますます人文学部棟院生室に無くてはならない存在となっている。

院生自主勉強会

他の大学では、学生や院生が企画し運営する勉強会などが多数存在する。中部大学では、すくなくとも筆者の学部生時代における個人的な体験によれば、中部大学や教員によって雇われるような形で学内のイベントに携わることであっても、自ら企画し運営する機会や学風には存外恵まれていないように思われた。とくに国際人間学研究科において、自主的な勉強会の開催が極めて低調なのに対し、強い危機意識を持った。

また、他の学科や学部にも所属する学生、他の専攻や研究科にも所属する院生と交流を深める契機も必ずしも多くないと思われた。人文学部棟院生室においては、前述のお茶コーナーによって専攻を越えた交流がある程度培われてきたが、互いの研究内容に対するより本格的な議論は、当初想像していたよりは進んでいなかった。とくに他専攻の院生が一体何をやっているのかについて知る機会



写真2：自主勉強会の様子（2016年10月例会）

は、極めて限られていた。結果として、同じ院生室で研究し、お茶スペースでよく世間話をするものの、お互いに相手が具体的にどのような研究をしているのかは知らないという、ある種奇妙な状況となっていた。

以上のような問題意識を持っていることを他の院生有志に相談した結果、2016年度春学期から「院生自主勉強会」を企画する運びとなった（写真2）。

企画にあたり、主目的は交流であること、そしてあくまで院生が自主的に行うものであることと定めた。報告のクオリティは必ずしも求めず、むしろ、学会などでは報告できないような研究上の悩みや失敗談でも構わないこととした。今のところ、学会報告や学内での報告を前にした発表練習的な使用のほか、自身の研究について、他分野あるいは他の研究手法を用いている院生の視点からの意見を乞うような報告が多数を占めている。また、院生が主体となって行うという形を維持するべく、会場の予約から告知などに至るまで、報告者が自ら行うルールとしている（写真3）。



写真3：セッティングを行う院生(報告者)たち

クリエイティブな院生室に

中部大学の建学の精神は「不言実行、あてになる人材の育成」である。近年、インターネットの普及やAI技術などに代表されるように、技術や生産様式の革新が続いている。そのような時代において、構造的な問題に対して愚痴を言い合うだけで終わるのではなく、正々堂々と指摘し、交渉し、改善あるいは革新へ向けて（実際に改善・革新に繋がるか否かは別として）行動する人材の存在は、ますます必要になっていると考える。

とくに院生には、学部生とは異なり、新規性のある研究を行い、またその研究を積極的に学会など学外へ発信していく力がより求められている。そのような中で院生室は、院生が主体的にかつ創造的な研究を行う場として欠かせない場所である。また、院生や院生室内での諸活動について、院生にはある程度の自由裁量が実質的に認められている。このような院生室は、学内において院生がその自主性を一番発揮できる場所でもある。以上のような意味において、院生室は院生にとってクリエイティブな精神を実践的に学ぶ場として重要な空間であるといえる。

もちろん、院生室における院生の勝手な振る舞いによって、（とくにコーヒーマーカー事件に代表されるように）意図せず教職員を当惑させ御迷惑をお掛けしてしまうことも少なくない。そのような点については、所詮は院生のする事として、誠に恐縮ながら、お付き合い賜らんことを願う次第である。

第6回 教員研究会を開催

国際人間学研究科では、研究科内で日頃、講義や演習指導などを担当している教員が専門分野の研究内容について講演をし、院生なども含めた参加者との間で交わされる質疑応答を通して研究内容の理解を深める研究会を定期的実施している。2016年11月30日の研究会は第6回目であり、国際関係学専攻の青木澄夫教授が第二次世界大戦以前から海外で活躍してきた日本人について、また、言語文化専攻の蜂矢真郷教授が日本における古代の言語について、それぞれ講演を行った。両教授ともこの分野における研究の第一人者であり、講演後、多数の質問がだされ、活発な議論が行われた。

中部大学国際人間学研究科主催

第6回 教員研究会

2016年11月30日(水)
17時30分～19時

25号館 2階 人文学部会議室

研究報告

青木澄夫 教授
国際人間学研究科 国際関係学専攻
報告題目「100年前のこんなところに日本人が
中部大学生生活13年間を振り返る」

蜂矢真郷 教授
国際人間学研究科 言語文化専攻
報告題目「伊 吹」

院生・学生の皆さんの来聴を歓迎します。



青木教授



蜂矢教授



研究会風景



中部大学国際人間学研究科

国際関係学、言語文化、心理学、歴史学・地理学の各専攻は、文化的、歴史的基盤にたちながら、国際社会でコミュニケーション能力や関係構築能力が十分発揮できる人材、あるいは人間、社会、地域の本質を把握し、柔軟に行動できる人材を総力を挙げて育成します。



国際関係学専攻

科目【博士前期課程】

国際政治経済研究コース

政治経済研究特論/国際法特論/国際政治学特論/国際経済学特論/国際機構論/応用計量経済学/国際金融論/国際協力論/開発経済学特論/開発ガバナンス論/発展途上国論/国際社会開発論

国際社会文化研究コース

社会文化研究特論/文化人類学特論/国際社会学特論/観光人類学特論/国際ジェンダー論/比較文明論/比較環境論/比較社会史論/比較宗教論/ヨーロッパ社会文化研究特論/アメリカ社会文化研究特論/中東・アフリカ社会文化研究特論/中国・アジア社会文化研究特論/国際比較文明論/地域言語特殊研究

共通科目

研究方法論/臨地研究論/近代世界表象体系

特別研究

研究指導/課題指導

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

国際政治経済学専門研究演習

国際社会文化論専門研究演習

国際比較文明論専門研究演習

心理学専攻

科目【博士前期課程】

心理学科目群

心理学研究法特論/知覚心理学特論/健康心理学特論

学校心理学科目群

認知心理学特論/社会心理学特論/発達心理学特論/臨床心理学特論/教育心理学特論/学習指導法特論/学校教育特論/障害児心理学特論/生徒指導特論/心理検査法特論/学校カウンセリング特論/教育統計学特論

特別研究

研究指導/課題指導

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

学習心理学専門研究/教育心理学専門研究/認知心理学専門研究/臨床心理学専門研究

言語文化専攻

科目【博士前期課程】

ジャーナリズムコース

研究基礎(情報収集、メディア・クリエイティビズム)/現代国家・制度特論/現代史特論/情報産業・流通特論/現代社会特論/社会心理学特論/情報技術とメディア特論/ジャーナリズムと倫理特論/現代の広報特論/報道記事作成技法/ドキュメンタリー作成技法/プロジェクト/研究指導

英語圏言語文化コース

応用言語学特論/英語教育法特論/英語学特論/英米文学特論/英語圏言語文化総論/研究指導

日本語日本文化コース

日本語学特論/日本語教育学特論/古典文学特論/近代文学特論/日本文化特論/伝承文芸特論/日本芸能特論/国語教育特論/研究指導

共通

近代世界表象体系

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

メディア・コミュニケーション専門研究

英語圏言語文化専門研究

日本語文化専門研究

歴史学・地理学専攻

科目【博士前期課程】

歴史学コース

日本古代史特論/日本中世史特論/日本近世史特論/日本近代史特論/日本現代史特論/アジア史特論/中国史特論/ヨーロッパ史特論/アメリカ史特論/社会経済史特論/思想史特論/文化史特論/技術史特論/美術史特論/歴史学研究

地理学コース

経済地理学特論/産業地理学特論/歴史地理学特論/文化地理学特論/都市地理学特論/地理情報学特論/都市政策学特論/自然地理学特論/地誌学特論/地理学研究

共通科目

近代世界表象体系

特別研究

研究指導


研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

歴史学専門研究演習

地理学専門研究演習

- 
-
- 発行：中部大学大学院国際人間学研究科
 - 編集者：林 上
 - 発行日：2017年2月20日
 - 〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200
 - 中部大学国際人間学研究科（国際関係学部事務室）
 - 電話：0568-51-4079（直通） ●ファクス：0568-52-1325
 - 電子メール：inkn@office.chubu.ac.jp
 - 国際人間学研究科ホームページアドレス：
http://www3.chubu.ac.jp/graduate/global_humanics/